

子どもの自己決定と領域別社会的ルールの発達

筑波大学大学院(博)心理学研究科 松尾 直博¹⁾

筑波大学心理学系 新井 邦二郎

Development of self-determination and distinct social rules in childhood and adolescence

Naohiro Matsuo and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study was to clarify the relation between distinct social rules and self-determination in childhood and adolescence. Elementary school pupils, junior and senior high school students answered questionnaires concerning self-determination and self-judgement of social rules. In a factor analysis, self-judgement about social rules was divided into four distinct domains; moral, conventional, personal-home, and personal-school. Self-judgement in each of four domains was related with self-determination differently, and subjects perceiving differences in social rules. The findings suggest that subjects who exhibit high self-determination have to appreciate the significance of moral, convention, and personal judgement through their experiences.

Key words: self-determination, self-judgement, social rule, elementary school pupils, junior and senior high school students

問題と目的

近年、子どもの自主性や自律性をより積極的に育もうという考え方が教育現場で広がってきている(新井, 1996)。その一方で、早い時期から自由を与え、決定権を与えることによってわがままで、他者や集団のことを考えない子どもたちが増加するのではないかという危惧もある。現代のモラルの乱れは、拡大され、歪められた自由主義、個人主義の氾濫に一因があると思われる。個人の自由は公共の福祉に反しない限りにおいて最優先されるものであり、何もかもが「自分の勝手」「個人の自由」の名の下に行われていいものではないと思われる。

本研究は、子どもの自己決定と道徳性の発達について、Turiel(1983)の異概念領域理論(distinct conceptual domain theory)の観点から検討することが

目的である。すでに多くの研究者が、道徳性の発達は他律的なものから自律的なものへと発達することを明らかにしており、その意味において自己決定の発達は道徳性の発達においても重要な鍵概念であると思われる。本研究では、児童・生徒の自己決定と領域別の社会的ルール(道徳領域、慣習領域、個人領域)との関係について検討することが主なねらいである。なお、一般に社会的ルールは、普遍的に他者の権利や公共の福祉に関連するルール(道徳領域)、学校、会社、地域社会などの限定された集団の機能を維持するために必要とされるルール(慣習領域)、善悪の問題ではなく個人の判断に委ねて良いルール(個人領域)とが区別される。

自己決定への欲求は、児童期後期から青年期前期にかけて他の年齢時期よりも強くなることが考えられ、その時期に拡大して、バランスを崩した自己決定感「自分の勝手」「個人の自由」という考えを道徳領域や慣習領域へも適用し、反社会的行動や大

1) 現所属は、東京学芸大学教育学部

人に対する強い反抗心を生み出している可能性もある。逆に、その時期になっても自己決定を十分に発達させていない子どもは、本来ならば個人の判断に委ねられている個人領域まで他者の判断や決定を優先させようとするかもしれない。つまり、後者の場合、他者や規則に対する過度の依存から、「指示待ち人間」になったり、自らのすすむべき道を見つげられずに不適応になる可能性もある。しかし、適切な自己決定感を発達させた子どもは、道徳、慣習、個人の3つの領域を明確に区別して理解し、自律的に社会的適応と自己実現の両方を満たしながら成長していくことができると思われる。

具体的には、自己決定行動尺度と自己決定意識尺度得点の高低と、道徳・慣習・個人の領域別ルール
の自己判断の度合いとの関係を検討する。

方法

被調査者 公立小学校5年生105名(男子58名, 女子47名), 中学校1年生144名(男子73名, 女子71名), 高校1年生107名(男子47名, 女子60名)。クラス
の数は、小学校3クラス, 中学校4クラス, 高校3クラスであった。高校の学力は、「中」程度である。

使用した尺度

1. 自己決定行動尺度 谷島・新井・松尾・天貝・佐藤・崔(1996)の自己決定行動尺度の20項目を使用した。これは、日常生活において被調査児がどの程度行動を自己決定しているかを測定する自己報告式の尺度であり、4件法で回答する。谷島ら(1996)で、信頼性、妥当性が確認されている。得点が高いほど、自己決定行動をよく行っていることを示している。
2. 自己決定意識尺度 佐藤・新井・谷島・松尾・天貝・崔(1996)の自己決定意識尺度の25項目を使用した。これは、被調査児が自己決定することに関して持っている有能感、志向性などの意識を測定する尺度であり、4件法で回答する。佐藤ら(1996)で、信頼性、妥当性が確認されている。得点が高いほど、自己決定意識が高いことを示している。
3. 領域別ルール自己判断測定質問紙 Turiel(1983)などを参考に新たに作成した27項目からなる尺度。一般的にあまり望ましくないと考えられている事柄に対して、どの程度自分で判断して好きにしてよいことであるのかの判断を4件法(「自分の好きなようにしてよい」「どちらか」というと自分の好きなようにしてよい」「どちらか」というと自分の好き勝手にしてはいけない」

「自分の好き勝手にしてはいけない」)で回答を求める。これらの回答を4~1点に得点化を行い、その得点を自己判断得点とした。この得点が高いほど、その事柄を自分の判断に従ってよいと考えていることを示している。

Turielの異概念領域理論に従って、道徳領域(他者の権利や公共の福祉に関連する普遍的なルール)、慣習領域(学校、会社、地域社会などの限定された集団の機能を維持するために必要とされた任意のルール)、個人領域(善悪の問題ではなく個人の判断に委ねてよいルール)の3つの下位領域を仮定しており、質問項目は3つの領域に関するものを含んでいる。

手続き 調査は質問紙を使用して行われた。調査の実施は、担任の教師の監督のもとで行われた。また、質問紙は無記名であった。

結果

1. 自己決定行動尺度と自己決定意識尺度の学年による得点の変化

自己決定行動尺度と自己決定意識尺度の信頼性を検証するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、自己決定行動尺度で.787、自己決定意識尺度で.833の値が得られ、高い内の一貫性が示された。また、自己決定行動尺度と自己決定意識尺度について学年ごとの平均得点を算出し、学年によって得点に差があるかを検討するために分散分析を行った。Table 1, 2から、以下のような結果が明らかにされた。

- a. Table 1からは、自己決定行動では、学年による得点の有意な差がみられ($F(2,349)=9.02, P>.001$), LSD法による下位検定の結果、全ての学年の間に5%水準で有意な差がみられ、学年があがるにつれて得点が上昇することが示された。
- イ. Table 2からは、自己決定意識でも、学年による得点の有意な差がみられ($F(2,349)=10.04,$

Table 1 自己決定行動得点の学年による変化

学年	平均	SD
小学5年	60.1	7.8
中学1年	62.5	8.7
高校1年	65.2	9.7
F値	9.02**	
多重比較	高1>中1>小5	

$P > .01$), LSD法による下位検定の結果, 小学5年生と高校1年生, 中学1年生と高校1年生の間に有意な差がみられた. その結果, 高校1年生の得点が小学5年生や中学1年生

の得点よりも高いことが示された.

Table 2 自己決定意識得点の学年による変化

学年	平均	SD
小学5年	76.5	8.4
中学1年	75.9	9.4
高校1年	80.0	10.3
F値	10.04**	
多重比較	高1 > 中1, 小5	

2. 領域別ルール自己判断測定尺度の因子分析

領域別ルール自己判断測定尺度の構造を検討するために, 27項目に対して因子分析を行った. 主因子法により固有値1以上の4因子を抽出し, バリマックス回転を行った. Table 3から, 以下のような結果が明らかになった.

- ア. 第1因子に負荷の高い項目は「人に暴力をふるう」「人のものを盗む」など, 普遍的に他者の権利の侵害に関連していると思われる内容であり, 「道徳領域」因子と命名された. 第2因子に負荷の高い項目は「廊下を走る」「学校の机に落書きをする」など, 学校や地

Table 3 領域別ルール自己判断尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
25 人に暴力をふるう	.728	.196	-.071	.213	.483
22 人のものをぬすむ	.714	.077	-.055	.089	.489
1 人を傷つけることをわざという	.645	.256	.020	.039	.568
7 自分より弱い人をおどす	.644	.237	.034	.256	.286
13 人のものをかくす	.637	.264	.061	.014	.480
19 いやがるあだ名で, 友だちを呼ぶ	.623	.237	.138	.107	.538
4 集団でひとりの人を無視する	.580	.171	.120	.017	.364
5 そうじをまじめにしない	.500	.456	.155	.180	.284
10 自分が得をするためにうそをつく	.455	.428	.200	.242	.588
16 友だちとの約束を破る	.423	.139	.108	.273	.555
8 ろうかをはしる	.323	.658	.217	.117	.475
11 学校のつくえに落書きをする	.319	.605	.288	.134	.475
14 授業中にさわぐ	.382	.602	.062	.163	.478
20 校舎に土足で上がる	.388	.537	.047	.193	.570
2 マンガの本を学校に持ってくる	.165	.518	.398	.145	.527
23 まちで信号無視をする	.356	.490	.139	.187	.421
21 友だちと長電話をする	.049	.219	.711	.119	.505
24 自分の気に入った服を買う	-.090	-.054	.703	-.019	.619
3 派手な服を着て遊びに行く	-.023	.113	.585	.241	.539
18 夜, 遅くまで起きている	.120	.330	.576	.317	.400
12 おこづかいで好きなものを買う	.090	.113	.497	.134	.414
9 テレビを何時間も見続ける	.202	.411	.457	.234	.380
26 宿題をやっていない	.193	.367	.293	.530	.514
27 ノートの字をきれいに書かない	.114	.210	.361	.462	.358
15 出された宿題以外は勉強をしない	.129	.222	.292	.461	.538
17 先生の言うことを聞かない	.423	.449	.052	.453	.598
6 運動しないで, 食べてばかりいる	.196	.034	.340	.450	.474
二乗和	4.65	3.47	2.99	1.81	12.92
寄与率	15.27	12.73	11.04	6.53	45.57

F1 道徳領域

F2 慣習領域

F3 個人(家庭)領域

F4 個人(学校)領域

域の集団の機能を維持するために決められた規則に関連する内容であり、「慣習領域」因子と命名された。第3因子に負荷の高い項目は「友だちと長電話をする」「自分の気に入った服を買う」など、家庭生活において個人の判断に委ねられることに関連する内容であり、「個人(家庭)領域」因子と命名された。第4因子に負荷の高い項目は「宿題をやっていかない」「ノートの字をきれいに書かない」など、主に学校生活において個人の判断に委ねられることに関連する内容であり、「個人(学校)領域」因子と命名された。

- イ. Turielの理論に基づいて「道徳」「慣習」「個人」の3つの領域を仮定していたが、因子分析の結果、個人領域が2つに分かれて4つの因子が抽出された。これは、今回の調査対象になった児童・生徒が学校生活に関連する個人領域の事柄を家庭生活に関連する個人領域の事柄と区別して反応していることが考えられるので、因子分析の結果にしたがって領域を4つであるとしてその他の分析を行った。
- ウ. なお、それぞれの因子に負荷の高い項目からなる4つの下位尺度を構成して、クロンバックの α 係数を算出し、信頼性の検討を行った。その結果、道徳領域で.865、慣習領域で.845、個人(家庭)領域で.800、個人(学校)領域で.763、という高い α 係数が得られ、4つの下位尺度について内的一貫性が確認された。

3. 領域別ルール自己判断得点の学年の変化

領域別ルールをどの程度自己判断してよいと思うかについて、学年による変化を見るために、領域ごとに自己判断得点に対して学年による1要因の分散分析を行った。なお、領域別自己判断尺度の4つの下位尺度の得点は、解釈を容易にするために各下位尺度ごとの合計得点を項目数で割った項目得点に変換した。

Table 4にその結果を示す。分散分析の結果、すべての領域別ルール自己判断得点において、学年の主効果が認められ、全体的には学年が上がるにつれて、すべての領域別ルールを自分で判断してよいもの者にとらえる度合いが強くなることが示された。

4. 自己決定行動と領域別ルール自己判断との関連

自己決定行動と領域別ルール自己判断との間にどのような関係があるのかを検討するために、自己決定行動尺度の得点と4つの領域別ルール自己判断下位尺度との相関係数を学年別に求めた。Table 5から、以下のような結果が明らかになった。

- ア. 小学5年生では自己決定行動と道徳領域(-.321, $p < .01$)、個人(学校)領域との間(-.336, $p < .01$)に負の有意な相関、個人(家庭)領域との間(.230, $p < .05$)に有意な正の相関がみられた。すなわち、自己決定行動の高い小学5年生は、道徳や個人(学校)領域では、自分の判断に従っていけないと考え、他方、個人(家庭)領域では自分の考えにしたがってよい

Table 4 領域別ルール自己判断得点の学年ごとの平均値(SD)

	道徳	慣習	個人(家庭)	個人(学校)
小学5年	1.37(.43)	1.59(.62)	2.72(.63)	2.01(.62)
中学1年	1.42(.50)	1.73(.66)	3.20(.64)	2.37(.72)
高校1年	1.55(.59)	2.27(.81)	3.59(.51)	2.61(.83)
F値	3.49*	28.08**	56.85**	18.54**
多重比較	高1 > 小5	高1 > 中1, 小5	高1 > 中1 > 小5	高1 > 中1 > 小5

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 5 自己決定行動と領域別ルール自己判断得点との関係

	道徳	慣習	個人・家庭	個人・学校
小学5年	-.321**	.015	.230*	-.336**
中学1年	-.256**	-.257**	.034	-.065
高校1年	-.103	-.217*	.149	-.089

* $p < .05$ ** $p < .01$

と考えることが示された。

イ. 中学1年では自己決定行動と道徳領域(-.256, $p < .01$), 慣習領域との間(-.257, $p < .01$)に負の有意な相関がみられた。すなわち, 自己決定行動の高い中学1年生ほど, 道徳と慣習領域で, 自分の判断に従ってはいけなと考えることが示された。

ウ. 高校1年生では自己決定行動と慣習領域との間に有意な負の相関(-.217, $p < .05$)がみられた。すなわち, 自己決定行動の高い高校1年生ほど, 慣習領域で自分の判断に従ってはいけなと考えることが示された。

5. 自己決定意識と領域別ルール自己判断との関連

自己決定意識と領域別ルール自己判断との間にどのような関係があるのかを検討するために, 自己決定意識尺度の得点と4つの領域別ルール自己判断下位尺度との相関係数を学年別に求めた。Table 6から, 以下の結果が明らかになった。

ア. 小学5年生では自己決定意識と個人(学校)領域との間に負の有意な相関(-.205, $p < .05$), 個人(家庭)領域との間に有意な正の相関(.234, $p < .05$)がみられた。すなわち, 自己決定意識の高い小学校5年生ほど, 個人(学校)領域では, 自分の判断に従ってはいけなと考へ, 他方, 個人(家庭)領域では自分の判断に従って良いと考えることが示された。

イ. 中学1年では自己決定意識と道徳領域(-.315, $p < .01$), 慣習領域との間(-.216, $p < .05$)に負の有意な相関がみられた。すなわち, 自己決定意識の高い中学1年生ほど, 道徳と慣習領域で自分の判断に従ってはいけなと考えることが示された。

ウ. 高校1年生では自己決定行動と道徳領域との間に有意な負の相関(-.317, $p < .01$), 個人(家庭)領域との間に有意な正の相関(.247, $p < .01$)がみられた。すなわち, 自己決定意識の高い高校1年生ほど, 道徳領域では, 自分の判断に従ってはいけなと考へ, 他方, 個

人(家庭)領域では自分の判断に従って良いと考えることが示された。

考 察

以下, 本研究で見いだされた主な結果について個別的に考察していく。

1. 領域別ルール自己判断測定尺度について

(1)領域別ルール自己判断測定尺度の27項目に対する因子分析の結果, 4因子が抽出され「道徳領域」「慣習領域」「個人(家庭)領域」「個人(学校)領域」と命名された。

Turiel は, 子どものもつ社会的概念もしくは知識が「道徳領域」「慣習領域」「個人領域」に分けられると仮定しているが, 今回の結果はそれとは若干異なるものとなった。すなわち, 日本の児童・生徒は「どの程度自分で判断して, その行動を行ってよいか」という自己判断の点においては, 個人領域を家庭生活に関する個人領域と, 学校生活に関する個人領域とを概念的に区別してとらえていることが示された。学歴偏重, 受験社会であるといわれる日本では, 学業に関する子どもへの圧力は強いものに対して, 特に家庭での学業に直接関係しないようなしつけは緩やかで, 子どもにかなり自由にさせる傾向になってきたといわれることがある。このような家庭と学校との違いの社会的背景から, 個人(家庭)が個人領域としてとらえられ, 個人(学校)領域はやや慣習領域的な特質を持ち合わせていると子どもがとらえた可能性が考えられる。

(2)領域別ルール自己判断質問紙の項目には複数の因子に対して.4以上の高い因子負荷量を示した項目もあり, これらの項目はTurielのいう「混合領域」に関連した内容であり, いくつかの側面を持つ内容であったと考えられる。特に, 「先生の言うことを聞かない」は, 道徳領域因子への負荷量が.432, 慣習領域への負荷量が.449, 個人(学校)領域への因子負荷量が.453であった。本研究においては, 個人(学校)領域への負荷量が最も高いという結果になったが, 今後さらに検討を要する項目である

Table 6 自己決定意識と領域別ルール自己判断得点との関係

	道徳	慣習	個人・家庭	個人・学校
小学5年	-.189	-.066	.234*	-.205*
中学1年	-.315**	-.216*	.090	-.052
高校1年	-.317**	-.030	.247**	-.107

* $p < .05$ ** $p < .01$

と思われる。

(3) 領域別ルール自己判断得点の学年による変化を検討したところ、学年が上がるにつれて、自己判断得点が上昇することが明らかになった。ただし、道徳領域の自己判断得点は学年による主効果は有意であったものの、他の領域よりもF値が低く、学年による得点の上昇が大きくないことが示された。これは、道徳領域に関しては、学年が上がっても、自分で判断してよいと思う度合いが他の領域よりも弱いことを反映していると思われる。

2. 自己決定行動、自己決定意識と領域別ルール自己判断との関係

(1) 一般的な自己決定行動、自己決定意識の高さと領域別ルール自己判断との関係については、興味深い結果が示された。自己決定行動、自己決定意識が高いからといって、どの領域においても自分で判断して好きに行動してよいと認識している程度が高いわけではないことが明らかになった。自己決定行動と自己決定意識を合わせたものを一般的な自己決定傾向と表現すれば、ある領域ではこの傾向が高いほど自己判断が許されていないと認識し、別の領域では自己決定傾向が高いほど自己判断が許されていると認識していた。この結果を、次に個別的に考察していく。

(2) 道徳領域では、一般的な自己決定傾向が高いほど自己判断が許されていないと認識していた。一般的な自己決定傾向が高い子どもは、他者の権利を侵害する行動も自己決定に基づいて好き勝手に行っていたとは考えておらず、道徳領域に関する問題では自己判断よりも道徳的ルールに従うべきであると認識していると思われる。

(3) 慣習領域でも全体的には一般的な自己決定傾向が高いほど自己判断が許されていないと認識していた。一般的な自己決定傾向が高い子どもは、慣習領域に関する問題では所属している集団の機能のために自己判断よりも慣習的ルールを優先すべきであると認識していると思われる。

(4) 個人(家庭)領域では、学年によって若干異なるが、一般的な自己決定傾向が高いほど、自己判断が許されていると認識していた。

個人(家庭)領域に関する問題は、家庭によっては何らかの取り決めがある場合も考えられるが、本質的には自己判断が許されている事柄であり、一般的な自己決定の傾向が直接反映されたと考えられる。

(5) 個人(学校)領域は、自己決定の高さと自己判断との間に負の関係がみられた。その関係は小学校5年では有意であったが、中学1年と高校1年では

有意ではなかった。

この結果は、小学生が個人(学校)領域を慣習領域に近いものとして認識し、学年があがるに従い徐々に個人領域に近いものと認識していることを示している。

(6) 自己決定傾向が高い子どもは、どのような領域に関係することがらも自己の判断を最優先してよいと考えているわけではなく、領域の違いを意識し、場合によっては道徳的規則や慣習的規則を優先させるべきであると認識していることが明らかになったといえよう。

自己決定は、統制感や自尊心とも関連しており、いくつかの選択肢の中から行動を自分自身で決定できるという感覚に基づいてると考えられる。したがって、道徳的規則や慣習的規則に自分を従わせるという選択肢を自己決定的に選んでいくとも考えられる。

自己決定行動得点が高い子どもは、日常の多くの活動で実際に自己決定的に行動しており、そうした活動を通じて道徳規則や慣習的規則を無視するような自己決定の導くネガティブな結果(他者を不快にさせる、集団の機能を低下させるなど)についても多くの経験をしていると考えられる。こうした経験が、子どもに領域の違いを適切に認識させる際に重要な役割を果たしていると考えられる。

また、高い自己決定意識は自己主張と道徳的規則、慣習的規則との葛藤によるネガティブな結果を経験した上で、自尊心や統制感の影響を受けながら発達するものであると思われる。高い自己決定意識を持つためには領域の違いを明確に区別できる必要があると考えられる。

(7) 自己決定行動が低いことは、自己決定することに伴う様々な経験をしていない可能性が高く、したがって領域の違いを強く認識する必要に迫られた経験をしてきていないことが考えられる。また、自己決定意識が低いことは、自己決定したいという欲求が十分に発達していないか、あるいは自己決定に伴うネガティブな経験により、自己決定することに対する動機づけが低下していることが考えられ、いずれにしろ領域の違いを認識する必要のない状態に自分をおいていると考えられる。

(8) 以上のことから、自己決定を発達させることが、自分勝手に、社会で適応できない子どもを育てることに直結する危険性は少ないといえるだろう。むしろ、社会的概念の領域の違いを適切に理解させ、個人の自由にしてよいことと道徳的規則、慣習的規則に従うべきことを区別できるようにするためには、自己決定行動を促進させ、自己決定意識を

育てることが必要であるように思われる。

引用文献

新井邦二郎 1996 小学生の自己決定経験の調査
筑波大学心理学研究, 18, 75-95.

佐藤 純・新井邦二郎・谷島弘仁・松尾直博・天貝
由美子・崔 京姫 1996 子どもの自己決定の発達
に関する研究[3] - 自己決定意識尺度の作成

- 日本教育心理学会第38回総会論文集, 86.

Turiel, E. 1983 *The development of social knowledge:
Morality and convention*. Cambridge University
Press.

谷島弘仁・新井邦二郎・松尾直博・天貝由美子・佐
藤 純・崔 京姫 1996 子どもの自己決定の発達
に関する研究[2] - 自己決定行動尺度の作成
- 日本教育心理学会第38回総会論文集, 85.

-1998. 3. 31 受稿-